

THEATRE & POLICY
通巻 75 号

THEATRE
&
POLICY

私がハミング・バードになる！

レイチェル・ベッツ

私たちはいつも直面する問題に砲撃され、
ときには完全に打ちのめされることもあります。

私がハミング・バードになりましょう。

私にできる最良のことをやるのです。

ワンガリ・マータイ

この夏、ケニアの環境運動家ワンガリ・マータイ博士（1940-2011年）と、彼女が家の裏庭に植えた9つの木の種が、ケニア国中に広がったグリーンベルト運動にいかにか広がったのかという実話をベースに、私たちは美しいコミュニティ・シアターの作品を創り上げた。

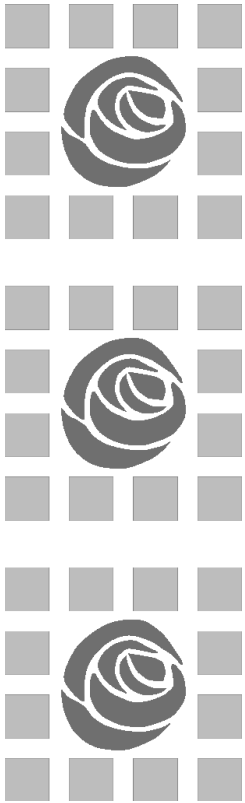
プロジェクトは、シアター・メーカー、プロデューサー、通訳、優秀な高校生とともに、第1日目からワンガリの種のように育っていったのである。最初に6人の子どもたちが到着。その子どもの親たちもまたプロジェクトに対して、熱心で強い関心を抱いているのがわかった。続いて、ピアノ・グループが到着した。障がいをもつ大人たちを支援する地元の団体である。この時点で、参加者たちはこのプロジェクトに何を期待しているのかわからず、また本質的かつ価値ある役割を果たしうるかどうかまったくわかってはいなかった。

このプロジェクトが美しいものになった理由の一つは、参加する一人ひとりが、自分自身の思いを織りこんでいったことにあった。週の半ばまでに、親たちは通訳を助ける役割を、また、クリエイティブでヴィジュアル性の高い装置や小道具を作り、演劇に命を吹き込む役割を担うようになっていたのである。

プロジェクトが進展とともに、信頼と親密な関係性が築かれていった。私の経験では、これは同じ言語を話すとき、とりわけワークショップの期間中においては、瞬間と瞬間のあいだのうちにある非常に微妙な積み重ねから築かれていく。しかし、今回の場合、参加者たちを理解し、この関係性を築くのに少しばかり時間がかかったように感じた。そのために、一定のペースを維持しながら、ワークショップを進めていくことを心しなければならなかった。私とともにいることが、私の指示が安全なものであり、楽しみうるものだと感じさせなければならなかったからである。

すぐに教えられたのは、演劇的な約束事について、全員が同じ理解をもってはじめることの重要性であり、意識的に、可能な限り、繊細に想定を行うことだった。

通訳の介在、理解、作業の進め方等、私にとってチャレン



ジと学習が溢れていた。これまで参加者の一人が何かを効果的にやったとしたら、その個人をグループから際立たせ、褒めることが自然だと考えていた。しかし、気づかされたのは、このような奨励のスタイルをポジティブに受け入れてもらうためには、私の声のトーンを柔らかくする必要があり、グループ全員の前ではこれをするべきではない場合もあるということだった。

私の声のトーンの変化が、参加者たちにとって大きな意味をもつものなのだと、すぐには認識できなかった。声のもつ強さやパッションが、ときにはネガティブに理解されることもありうるのだということである。グループを不安定で居心地の悪いものにしてしまうかもしれないのだ。次第にわかってくるにつれて、コミュニケーションのために、声のトーンを明瞭、明快に使い分けられるようになっていった。様々な演劇の約束事、グループが分かち合うボキャブラリー、そしてお互いを励まし合い、作品を批評する構造を獲得するにつれ、私たちはともに創造的に演劇を作る集団になりはじめたのである。

このプロジェクトは、また『私がハミング・バードになる』と呼ばれるマータイ女史の物語によってインスパイアされたものである。物語には、巨大な森の火事を消すために、小さなくちばしで水のしずくを運びながら、行ったり来たりするハミング・バードが登場する。森の動物たちは、「おまえなんかちっぽけ過ぎて、何の変化ももたらせない」とハミング・バードを笑う。しかし、物語が示唆するのは、私たちがちっぽけで、とるにたらない、力のない存在であると感じていてさえも、それでも尚、ベストを尽くしうるということである。

私たちが創り上げた作品とパフォーマンスの基礎をなしているテーマの一つがここにある。それぞれに異なる地点で、私たち全員が、ワンガリ・マータイの物語に登場するハミング・バードに

よって私たち自身のうちにある勇気と信念を感じたように思う。一つの集団として、「私がハミング・バードになる」というこの精神を分かち合った。「私は自分のできるベストを尽くす」は、リハーサルの過程、そしてパフォーマンスのあいだ中、輝き続けた。日本を訪問し、このように素晴らしい人々との協働できたことが、私に「私がハミング・バードになる」ことの意味を改めて思い起こさせている。そして、子どもたちやコミュニティとともに演劇に携わり、演出するという私のパッションをさらに強いものにしてしまったようである。



Rachel Betts

演出家／パッチワーク・シアター代表
ステージコーチ演劇学校校長

ロンドン大学ロイヤルホロウェイ校演劇学部卒、同大学院でヘレン・ニコルソン教授のもとで応用演劇を学び、優秀な成績で卒業。2007年、パッチワーク・シアターを設立し、バークシャー州ならびにバッキンガムシャー州を中心に小中学校やコミュニティでの演劇活動を展開。また、クリエイティブパートナーシップの様々なプロジェクト、病院での演劇活動、さらにはインドや南アフリカなどでの国際的な活動にも携わる。母校でシアターインエデュケーションを指導する傍ら、2011年からは、青少年対象の演劇学校ステージコーチの校長に就任し、その活動の幅をさらに広げている。英国ではめずらしい低年齢層との演劇・表現活動を得意とする指導者である。

意味ある演劇テキ活動 それは応用演劇！

田村 ちひろ

初めまして皆さん、私は三原キッズステーションの代表者、税理士の田村ちひろです。そうです。私はあらゆる公の場にダブルネームで出ています。勘の鋭い方ならお分かりでしょうか？ パラレルキャリアの一方は、完全に無償労働。こんな生き方を 20 と数年続けています。ITのおかげで『今週は連れ合いよりも、半分イギリスにいるような夏織さんとのコミュニケーションの頻度が高かった。』なんてことが当たり前になりました。コミュニティでの仕事も、専門の仕事も、主婦テキ労働も、まあまあなんとかこなせています。

自発的な地域活動としての三原親子劇場運営委員長時代には、何 10 回となく子ども向け、ファミリー向けの人形劇や演劇、音楽など興行を重ねてきました。約 12 年前私なりの思いもあって、三原キッズステーションといういわば子どもの表現活動に特化した任意団体を立ち上げたのです。

そして約 2 年が過ぎたときふと周りを見渡すと、なんとこの人口 10 万人たらずのこの田舎町になんと「市民ミュージカル」というカテゴリーを標榜する団体が 2 つも乱立しているではありませんか？ 吹けば飛ぶような小さく弱いボランティア団体が、そんな狭間、つまり営利企業との厳しい競争環境に置かれた事が三原キッズステーションの転換点でもあり、中山夏織女史(女史の部分を強調してね!) とのお付き合いの始まりでした。

そして、助成金をうまうまと獲得はするものの、子どものための表現活動の「意味的価値」を理解するにはまだまだ遠く及ばなかった私を、ここまで誘ってくれたのはシアタープランニングネットワーク主催のシルビア・ダウさんのシンポジウム(2003年)でした。企画を重ねながらドラマ教育を学び、ディバイジング学びながら実践し、という連続線の上に、今日の三原キッズステーションの活動は存在しています。

もっとも記念的だったのは、ロンドン大学ホロウェイ校とTPNと三原キッズ。3団体のコラボレーションでしょうか。複数の助成金を調達し、3名のロンドンからの学生、4名の日本人インターン生を交えた、この年の

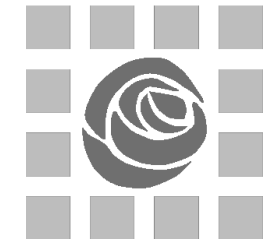
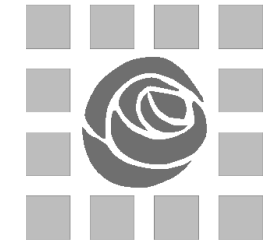
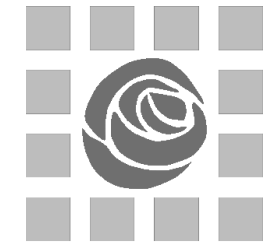
企画の壮大なテーマは、シチズンシップ。『何らかの社会的課題を見出し、自分たちで考え、自分たちで決めて、自らの行動と結果に責任を持つこと。』どうかそのような市民に育てて欲しいと！

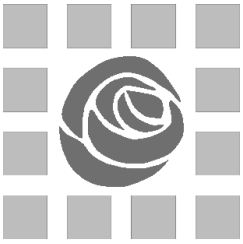
この年までに、夏休み中 20 人前後の小学生と 2 泊 3 日の合宿をしては WS を重ね、最後には必ず成果発表会を開催して内気で引込み思案な子どもたちに自信をつけるという『三原キッズの夏休みドラマスクール』という枠組みは確立されていました。『三原キッズの夏ドラ』という仕組みを考えしたのは私ですが、その仕組みに適切なコンテンツを投入し、総監修を続けてくれたのは夏織さん。夏織さんが三原に来られた際には、大学生高校生になった三原キッズの子ども達がたくさん寄ってくれます。ちよっぴり自慢ですけどね、三原キッズステーションをスルーした子どもたちの中から、10 人弱の子どもたちが、演劇や音響照明等、演劇関係の方向性を持って進学していきました。

私と夏織さんと三原の子どもたちというこの「縁(えにし)」に、この夏は超元気で超前向きな NPO 法人 PianoPiano さんが加わり、今また新たな転換点を迎えています。これからは舞台表現という場における「ソーシャル・インクルージョン」という理念を、理念に終わらせることなく着実に実践に変えていきたいと思っています。

最後に、ドラマ教育という素地のまったくない日本の子どもたちと大変重い障害者グループとの混成集団をいきなり目前にして、一瞬たりともひるむこともなく前に前にと進み、参加者したすべて人々を勇気づけすばらしい成果を上げてくれた若きリーダー、レイチェル・ベッツ(ミニ・ヘレン)と彼女を派遣してくれたヘレン・ニコルソン博士に心からの感謝を捧げます。(夏織さん、かっこよく訳して送ってね。)

(たむらちひろ/税理士
(認定NPO法人)NPO会計事務ネットワーク理事)





ドラマ体験—継続性と化学反応

中山 夏織

2008年夏以来、久々の三原でのドラマスクールの開催である。4年という年月は、対象となる小学校の子どもたちにとっては「世代交替」的な長さをもつ。実際、前回のドラマスクールに参加した経験のある子どもは、当時小学校1年生だった女の子ひとりだけ。他は全員初参加である。同時に、鑑賞のみならず、演劇的体験を経験したことのある子どもたちはきわめて少なく、そのために講師レイチェルとともに、最初、私が戸惑ったのは、「演劇的言語」をどう伝えるのかということである。

例えば、「質の高いパフォーマンスを作るために」とレイチェルが熱く語るのを、いかに訳すのか？ パフォーマンスという言葉は使えない。演劇といってもわからない。劇ならわからなくはない。だが、何よりも「質の高い」という意味を、きわめて限られた演劇的体験しか持たない子どもたちに対して、いかに伝えるのか。

2008年以前は、毎年のようにドラマスクールを開催してきたので、常連組が数多くいて、新しい仲間が増えても、言葉においても概念においても継続性を保つことができた。年齢による理解力の差を補うように日本語を補足すれば事足りていたのである。

しかし、今回、4年というブランクはその継続性を取っ払ってしまった。だから、「想像力を使って、お芝居を作るのよ」という言葉も、演劇なるものの環境において、想像力なるものを使うということ、具体的に事例を示して、見本を示して説明する必要があった。幼児のころから多数の演劇的体験を持つ英国の子どもたちに指導することに慣れているレイチェルにとっても、これが最初のハードルになったと思う。そのため、想像力を使って、モノや身体を他のモノに見立てるエキササイズを使って、想像力を使った演劇の約束事やウソが何たるかを教えることに立ち戻ってみた。最初は戸惑いがあった。しかし、一旦理解すると、子どもたちの想像力は一気に広がりを見せるようになった。これでうまくいくと確信できた。

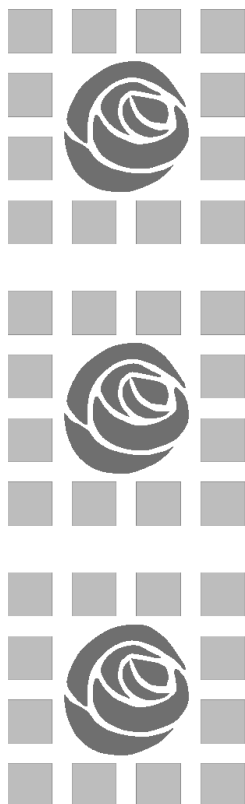
もう一つ大きなハードルがあった。健常児と障がいをもつ大人や青少年との協働がいかんにして可能となるのか、ということである。レイチェルにとっても、私にとっても初めての体験であり、実際、どのような協働が可能なのか、「ピアノピアノ」グループのメンバーがどのような障がいを持つ方々なのか、彼らに演劇的関心はあるのか。

三原芸術文化センターのリハーサル室に車いすの一群が続々と登場した時の子どもたちの表情は、ポカン。目はまん丸。次に、それが好奇心へと転じていった。

一方の「ピアノピアノ」グループは、当初、演劇的関心があったわけではなかったらしい。そもそもどんなことをやるのかわからなかったからである。しかし、子どもたちと一緒にゲームに参加し、演劇的な作業を続けて行くなかで、出席率がよくなるとともに、新しいメンバーも増えていった。同時に、子どもたちや私たちへの語りかけも増えていった。おしゃれをしてくる参加者もいた。また、介護スタッフらも一緒になって楽しんでいるのもわかった。

とりわけ、彼らが本領を発揮したのが、装置づくりである。段ボールを使って街のビルを作るという作業なのだが、子どもたちは運ばなきゃならないということなどお構いなし、奔放に、テープをべたべた貼りつけながら作っていく一方で、作業所の機能をもつ「ピアノピアノ」のメンバーは、運搬を考慮して折りたたみ可能にするという配慮のみならず、精巧かつ緻密な作り方で私たちを驚かせた。

演劇のプロジェクトでは、ときどき化学反応が起こる。予期せぬポジティブな展開や結末が生まれる。「ピアノピアノ」グループの積極的関与もそうだが、子どもたちのなかでも多くの変化が見えた。演劇という概念をいち早くキャッチした男の子は、演劇的表現のリーダーとしての役割を果たし始めた。バイリンガルの少女たちは、いつしかゲームなどで通訳の役割



を担い始めた。また、少しばかり暴走する男の子に対し、ある女の子が「〇〇があんなことをするのは、うちらがちゃんとしていないからじゃけん」とチームとしての対処を問うた。信じられないかもしれないが、これらはすべて小学校3年生たちの言動である。

1週間という短い時間のなかでも、二つの異なるグループも次第に溶け込み始めていった。子どもたちも身体の不自由を抱える人たちのかたわらで、手伝うことが増えていった。それぞれ分かれて作業することが多かったから、お互いの作業を見ながら、お互いを理解していったといったほうがいいのかもわからない。

最後のパフォーマンスの発表の後、混じって写真を撮り合う姿に、この1週間のことを思った。そして、子どもたちからも、障がいをもつ方々からも来年もやりたいという声を聞いて、たじろいだ。同じことが、これ以上のことが果たして可能なのかと。同時に、感謝の念で一杯になった。あなた方と一緒に過ごせた時間に対して。

(なかやまかおり／プロデューサー・
ドラマ教育アドバイザー)



ホスピタルシアター プロジェクト 2012 巡演中！

日本財団のご支援を得て、「ホスピタルシアタープロジェクト 2012」(「クラウン&アクター協働プロジェクト」から改称)が、試行錯誤のディスカッションとワークショップから生まれた、参加型のパフォーマンス『ペランとパローレの冒険』の施設・病院ツアーがはじまりました。その前半のツアーの様様をご報告します。

《物語》

南の国ジャングルで、美しい虹の朝に生まれた少年ペランは、オウムのパローレとパローラと仲良く暮らしています。ある満月の夜、突然、パローラが黒い影にさらわれてしまいました。パローラを探して、ペランとパローレは様々な国を旅していくのですが…さあ、パローラと再会できるのでしょうか？

DAY 1 NPO法人なゆた（千葉県浦安市）

今年度のプロジェクトが創造した『ペランとパローレの物語』の初日は、15名の子どもたちと8名の父兄とスタッフが観客とともに、いまでも東北大地震の液状化の被害の跡が生々しく残る千葉県浦安市で迎えた。NPO法人なゆたが運営する、震災直前に開所した障がい児をもつ子どもたちの放課後デイサービス。昨年に引き続き、2度目の訪問である。

とにかく明るい、とにかく暖かい。この組織にはいつも笑顔が溢れていて、むしろ、ケアされ、癒されているのは私たちの方じゃないか感じてしまう。そう、だから帰ってきたくなる。絶対にここに。そんな場所を支えるスタッフや家族たちには頭が下がる。

カンパニーが到着した時には、会場は準備万端。子どもたちは即席の客席に陣取って、待ち受けている。「おっと」、急がなきゃ。カンパニーが準備するあいだも好奇心を抱えて、それぞれ色々とアプローチしてくる。ふと気づくと言葉もなく静かに、私の腕に自分の腕をまわす少年。自分たちの大切な場所への客人をエスコートしてくれている。

開演に先立ち、子どもたちの劇中への参加を促すために、劇中で登場するネコの鳴き声や動きの真似、色にはどんな色があるのか等をベテラン山崎哲史がナビゲーションに繰り出す。乗りは上々。参加する観客としての準備ができていく。

さあ、開演。子どもたちはいかに反応し、参加してくれるのか。でも、子どもたちは礼儀正しく、舞台の上に入ってこようとはしない（準備の際に、スタッフから舞台と客席の境界線をひこうかと言われて、実は断った）。ただ一度だけ、トイレトペーパーで巻かれたミイラが登場したときには、それまでは大人しく観劇していた一人の少年が歓喜のあまり（？）立ち上がって、介護者に止められた。ほんとは乱入して、絡んでもらってもよかったんだけど...ま、いいか。それでも、彼の琴線に触れたことはたしかだ。怒られるかもしれないが、自分もやってみたいと感じてくれたら（そして、試してくれたら）たまらなくうれしい。

劇中では、ネコのシーンが圧巻。子どもたち（だけでなく、介護スタッフや父兄たちも！）は誰もがネコになった。ネコの鳴き声に、ネコの動き。鏡のムーブメントに子どもたちははまる。わかりやすい。だが、わかりやすいことが、果たして、望ましいことなのか。象徴性をどこまでとりいれられるのか。まだ、まだわからない。これこそが今回のプロジェクトの究極の問いのひとつである。今年のツアーのなかで、この問いを考えていきたいと思う。

（中山夏織）

DAY 2 国立福島病院・福島病院祭（福島県須賀川市）

気温29度。真夏日のような暑さのなか、高速バス、タクシーを乗り継ぎ、12時20分現地到着、担当者の方と会場設定を確認、椅子 楽器テーブル、つい立2つを拝借。

始まる前は、13時50分開始といわれていたが、ぎりぎりまで舞台となる会場がキッズ広場となっていて、おもちゃがおいてあったため片付けなどに時間がかかり7分押しくらいでスタート。観客は、大人約30名（保護者、介護者、入院中の高齢者ら）、子ども約20名（病棟入院児、外部からの子どもたち）。

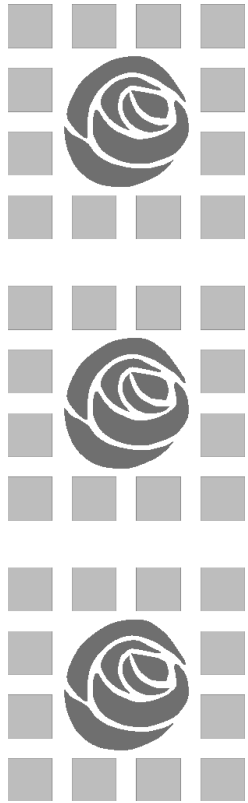
イントロダクションで、子どもたちに色の名前を聞いたり、猫の声を一緒に出してもらったり、ジャングルの音を出してもらったりすることで参加意識が芽生え惹きつけられたように思う。

子どもたちは、思い思いに音を出し、またそれを演者から承認されることによって生き生き発言していた。

ストーリーは、分かりやすく話そうと役者一人ひとりが語りかけるようにゆっくり話していたり、子どもたちとのふれあいの時間を長めにとったことによって40分ほどの内容になってしまったが、猫になって子どもたち、少し遠くからベッドで寝ながら見ている子どもたちのところへ出演者が向向き触れ合うシーンはとても好評で、記念写真を子ども一人ひとりとした場面もあった。これは、その時々々の喜んでもらえる盛り上がり方により、出演者自身が時間の調整を臨機応変にしていける必要が、今後もあると強く感じた。

オーロラのシーンは、ご年配の方がたが、「きれいだねえ」と声を出して





言ってくれ、思ったより布であっても想像力をかきたて美しく感じてもらえるのだと思えた。

悪役も登場する。子どもたちはハラハラして、サンタが連れさられそうになるシーンでは、「おい！うしろ！」とサンタに注意する場面もあり、子どもの物語に入り込む力を感じた。

参加型という性質上、子どもたちの集中力も保てたように思うが、ベッドに寝たきりの方たちにももう少し前のほうで見てもらえるよう、事前に担当者との打ち合わせが必要と感じた。

また、もう少し事前に舞台に必要なものを伝えられていると担当者の方も当日あたふたしないと、こちら側の事前連絡にも改善が必要。今後は、会場図や写真等を送ってもらい、そこをイメージしながら舞台をつくっていきとよりよい作品ができるのではないかと思います。

ご担当者からも、「来年もよろしくお願いします」と言葉をかけていただき、改善した上で来年につなげていきたい。(畠村麗子)

DAY3 世田谷区立すまいる梅ヶ丘 (東京都世田谷区)

一昨年の「クラウン」のプロジェクトでもお伺いしたことのある障がい者のデイサービス。準備の段階から、1名が関心を示して、昼食をとろうとしない。スタッフがかわるがわる誘いにやってくる。気になってしかたがないし、手伝いをしたくてしかたがないのが強く感じられた。観客から隠れて準備できるスペースがあれば、昼食の邪魔をすることもないのだが、もとより劇場とは異なる場所での上演のため、これも参加の一つと考える必要があるのかもしれない。

観客は、25名の障がいをもつ方々と、介護スタッフ12名。

今回のプロジェクトで主たる観客が子どもじゃないはじめてのパフォーマンスである。出演者たちもそれなりに緊張しているのがわかる。また、サンタの衣裳を忘れていたというハプニングもあり、「さあ、どうする？」

しかし、衣裳を忘れたことが、かえって物語にほんの少しの「厚み」と、観客のさらなる参加をもたらしたように見えた。黒いサンタクローズが登場したのである。観客からは、「違う！」という声が飛び交う。それでもサンタはサンタであり、連れ去られそうになるシーンでは、「許せない！」という声も飛んだ。

その前のネコのシーンは、ここでも楽しいものになった。どこか馬鹿らしい感のあるネコが年齢を越えて分かち合い楽しめるのは、不思議というの

か、不変というのか。遊びとはこういうものなのだ。

これまで出演者たちに精神的余裕がなかったため、要求できていなかった終演後の交流が、今回は可能となった。観客の感想を聞き、ネコの手や、ロボットのムーブメントをもって、交流を行う。実際、これが功を奏したとみえたのは、上演中は戸惑い、即時的に参加し得なかった方々が、精神的に余裕をもって参加でき、遊べる時間となったことである。わかりきったことのはずが、懸命になっていると見落としてしまう。私たちにとって大切な学習となった。(中山夏織)

DAY4 板橋・もちの木 (東京都板橋区)

「昨年もきてくれたよね」

子どもたちから声がかかる。ツアー前半の最終日は、板橋区の児童デイサービスのもちの木。昨年に引き続いての訪問である。準備をしている最中にも、子どもたちは色々に関わり合ってくる。容赦がない。

実は、出演者一人ひとりのスケジュールの関係で、毎回、同じメンバーでカンパニーが構成されているわけではない。毎回若干メンバーが変遷する。つまり役が変わる。だから、カンパニーの一人ひとりにとって、毎回、初日的な感覚を維持してツアーは進行している。緊張感は消えない。そのためパフォーマンスの前は、長い長いディスカッションと確認に次ぐ、確認。それでも幕はあく。準備が整い、さあ、開演。

観客は、9名の子どもたちと5名のスタッフ。これまでで最少人数だが、利点もある。一つには一人ひとりの子どもたちの反応に対応しようということ。スピードを高めたり、落としたり。また、子どもたちが何に反応を示すのかが明確にわかってこちらとしても心強いということがある。実際、一人ひとりの子どもが反応する場所は異なる。ネコのマネを楽しむ子もいれば、布を使ったオーロラに歓喜する少女もいる。また、ロボット(機械)の動きに即座に反応して、ロボットとして参入してくる子どももいる(スタッフが止めてしまうのだけど、止めなくていいよ〜)。終演後、子どもたちとともに、ロボットの動きを繰り返し、遊んだ。

スタッフの話では、こんなに大人しく、真剣に見ていたのはかなり珍しいことだという。お世辞半分を受け取ったとしても、子どもたちの反応は見えて楽しかった。

「来年も来てね」。この言葉はパワフルだ。(中山夏織)

編集後記

9月末、日本俳優連合と一緒に、F I A（国際俳優連合）の第20回大会に参加するために、カナダのトロントへ向かいました。4年に1度、世界中から俳優（国によっては、ダンサーやオペラ歌手、コメディアン等も）の組合の代表たちが、世界のどこかで集い、それぞれが抱える問題を提起し、共通の問題として連帯をもって対峙していく…。揺らぐ公的助成制度、十分に保護されているとはいえない難しい知的財産権や人格権、早期に迫られるダンサーのキャリア・チェンジ、いままもない労働環境、文化産業・芸術現場におけるジェンダーによる差別（男女差別だけでなく、ゲイやトランスジェンダーをも含む課題です）…そして、ひたひたと忍び寄る感をもって広がる表現の自由に対する規制、検閲や、ときに弾圧…。議論を聞きながら思い知らされるのは、文化政策においても、演劇現場においても、日本という国がなかなか世界と分かち合えない、つながりにくい、ある意味、特殊な位置づけにあると言うことです。どこかずれてしまっている。また、私自身も含めて、世界とともに生きているとい意識が醸成されていない、そのためのトレーニングがされていない、そこで語るべき言葉を持ってない、コミュニケーションのあり方がわからない。そういう教育なかったからなのだと愚痴れば、それがその人の限界。世界をもっと学びたい、世界をもっと分かち合いたい。強く心を動かされた次第です。同時に、後継者の育成も突きつけられています。一緒に試行錯誤、もがきながらも、学んでくれる若い世代を求めているのですが…愚痴るのは辞めておきましょう。

私のようなものがこのような国際会議に参加させていただけることに感謝するとともに、その度に思うのは、いま一緒にこの場にいる少なからぬ人々とは、もう二度と会うことはないだろうということです。一期一会。いまここでだけ。この意味もあって、今回最も嬉しかったのは、F I A前事務局長のキャサリン・サンド女史と12年ぶりに再会したことです。はじめて会ったのは、1995年11月、二度目のロンドン留学直前のF I M（国際音楽家ユニオン）東京大会の際。当時、事務局が英国俳優組合エクイティの中にあっただけでもあり、紹介されました。その後は、同世代のガールズ同士、個人的にも親しくなって、ああだ、こうだ、きゃあ（ガールズ・トーク）。一年の三分の一以上は世界中を飛び回らなければならないF I A事務局長から、アメリカで結婚、双子の母親になり…年月の流れを感じるとともに、感謝の念で一杯となりました。（中山夏織）

特定非営利活動法人

シアタープランニングネットワーク（TPN）

舞台芸術関連の様々な職業のためのセミナーやワークショップをはじめ、調査研究、情報サービス、コンサルティングなど、舞台芸術にかかるインフラストラクチャー確立をめざすヒューマン・ネットワークです。国際的な視野から、舞台芸術と社会との関係性の強化、舞台芸術関連職業のトレーニングの理念構築とその具現化、文化政策・アートマネジメントにかかる情報の共有化、そしてメインストリーム・シアターとコミュニティ・シアターの相互リンクを目的としています。2000年12月6日、東京都よりNPO法人として認証され、12月11日、正式に設立されました。

THEATRE & POLICY シアター&ポリシー

TPNの基幹事業として、2000年6月から定期発行（隔月間・年6回）されています。定期購読をご希望の方は事務局までご連絡下さい。

発行 特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク 発行人・編集人 中山 夏織

〒182-0003 東京都調布市若葉町1-33-43-202 Tel & Fax (03)5384-8715 tpn1@msb.biglobe.ne.jp

http://www.5a.biglobe.ne.jp/~tpn

「TPNファンド」

2012年4月、改訂NPO法が施行され、税制優遇の受けられる認定NPO法人化のための条件が緩和され、新たに「パブリック・サポート・テスト（PST）」が導入されました。PSTは、そのNPO法人が広く市民から支援されているかを判定するための基準と説明されていますが、具体的には、実績判定期間において、各事業年度に3,000円以上の寄付を100名以上から受けているかを問うものです。

TPNも認定NPO法人化をめざし、皆様のご寄付を頂戴いたしたく、ここにお願ひ申し上げます。ご寄付いただいた金額につきましては、独占的に、当法人の福祉領域における演劇・表現活動、ならびに、その研究に限定して活用させていただく所存であり、また、その金額ならびに用途につきましては当法人のHP、本誌において詳細をご報告させていただきます。

★ご寄付の方法について★

摘要欄に「TPNファンド」とご記載のうえ、郵便振替口座へご送金くださいませ。

郵便振替口座

00190-0-191663

1口 3,000円

よろしくお願ひ申し上げます。